

題目：日本の性風俗を利用する男性客イメージの再考に向けて

大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程2年 廣畑志織

本研究は、国内での性風俗に関する議論を女性学のみが担うことの限界を提示し、新たな視座をもたらす可能性を男性学に求めるものである。

日本の性風俗に関する先行研究は、①近世以前の遊郭や、近代国家形成過程での公娼制度をめぐる歴史社会学と②性の売買をめぐる女性学を中心とした議論の二つに大別される。後者において特筆すべき議論が、90年代に勃興した「性の商品化」をめぐる論争である。

「性を売るのは良いことか悪いことか」を問う議論は、売買春やポルノ、ミスコンといった題材をもとに展開された。杉田聡、若尾典子、中里見博といった論者は、ポルノグラフィ・性売買に対し批判的な立場を取っていた。彼らの主張とは、「性は男性集団から女性集団への支配の道具」であり、杉田の言葉を借りれば「男性は女の体を使ったマスターベーションを行なっている」というものであった。売買春において、売る側がいるのは買う側がいるせいだとして、支配される被害者としての女性と支配する加害者としての男性という構図は固定されていく。ただし、そのような「性の商品化」をめぐる議論は、実際に性売買と称される現場の実態を省みることのない、構造的な議論に終始していたと言える。2000年代に入ると、セックスワーク論を中心に、性売買の犠牲者としての可哀想な女性像は、労働主体としての女性像へと更新されていく。そして、働く女性に着目した研究も含め、近年の研究からは画一的な「支配的な男性客」像では捉えられない男性客の姿が浮かび上がっている。にもかかわらず、「支配的な男性客」像の検討は進められていない。

そこで、男性学・男性研究において、男性客を研究対象に据え、彼らを中心として問題を立て直す可能性を模索する。男性学は当初、「生きづらさ」として男性の被抑圧性を取り上げていたが、近年は男性から女性をはじめとした他者への支配からの脱却が目指され、女性学との連帯への意識が高まりつつある。男性の加害性に焦点を当てた研究も行われており、そのゴールは、加害的な男性像から脱却することにある。一部の男性客にも、風俗嬢への本番強要などの加害性が認められるため、男性の加害性を問題とした場合に、その対象の一つとして男性客を捉えることは可能である。そして、現状の男性学の方向性と、これまでの「性の商品化」をめぐる議論を踏まえると、男性学で風俗をテーマとして扱う際に目指されるのは、現場における女性への直接的な暴力という加害性の克服だけではないだろう。最終的に男性が性風俗に行かなくなることがゴールとして順当だと考えられる。もちろん、男性から女性への構造的な加害に目を向け、その解消を目指すことは重要である。ただし、このような方向性においては、風俗嬢への加害行為もなく、特段問題が生じていないような男性客を捉えることはできない。よって、現状の男性学が捉えうる射程内では、いかにも「支配的な男性客」しか扱うことができず、それ以外の男性客から見えてくるものを取りこぼしてしまうのではないか。

本稿では、性風俗に関する議論に新たな視座を投じるため、そして男性学の幅を広げるためにも、男性学が男性客について論じうる可能性を提示する。